



ロボット社との経営統合で  
念願の映像制作部門に進出

映像制作を軸に放送、人材サービス、映像機器開発まで幅広く展開しているイマジカ・ロボットホールディングス。1935年に日本映画の聖地である京都太秦で、映画フィルムの実験・上映用プリント事業を目的に極東現像所として創業したことに始まる。

創業した30年代に日本映画は黄金期を迎え、その後40年代にはテレビメディアが誕生。70年代には現在のインターネットメディアが米国で誕生し、今では全く新しい電子メディアなどによって映像の世界は多様化している。

この環境変化の中で、同社は映像の企画を創り、それを実現するためのプロダクション機能を持ち、それらに適した人材の育成や派遣、映像制作作用のシステム開発販売も含めて、映像制作のすべての局面でかわり続

ができました」

川上から川下まで「一通貫のバリエーションを展開

「長いこと映画フィルムでは6割くらいのシェアを維持していましたが、いずれフィルムは無くなると考えていたので、現像だけでなくビデオの編集、そし



長瀬朋彦

イマジカ・ロボットホールディングス社長

「映像へのこだわりで  
人々に楽しい驚きをお届けする  
“魔法の工場”を目指す」

けて、映像コンテンツを緑の下で支えてきた会社である。「商号はその後、東洋現像所としてイマジカに変更し、2006年に映画などを企画制作するロボットと経営統合すると共に、ホールディング制に移行し、その下に5事業、全16社で構成する現在の形になりました」

化学品などを扱う専門  
商社・長瀬  
商店現・長瀬  
産業)の  
常務だった  
祖父の長瀬  
徳太郎氏が  
米イーストマン・コダック社からの映画用フィルムの輸入を開始し、その後現像所を創業した。長瀬家と映像業界との結び付き

て映像制作へと徐々に映像事業の幅を広げました。一時は減った映画館もその後増えて、2010年には記録的な現像・プリント量となりましたが、これをピークに1年半ほどで10分の1くらいに急減。これには参りました」

とはいえ、フィルムの加工の

減少をデジタルシネマの増加その他で補い、営業収益は上向いている。現在は映画館へはデジタルシネマ用のハードディスクで納品しており、シェアはフィルムの頃より上がっている。テレビのパラエ

ティー番組やテレビCMの映像処理の多くを手掛けており、この映像に関する限り、何らかの形でイマジカグループとかわりを持つ会社は多いとか。制作も映画だけでなく、音楽映像、3Dイベント映像などが成長。放送事業では映画専門のBS放送チャンネルも開局した。

「映像コミュニケーションの新たな価値創造に努め、人々に楽しい驚きをお届けする『魔法の工場』を標榜し、『映像の川上から川下までを一貫通貫で手掛ける会社は、内外問わず当社だけ』と自信を見せる。

今、同社が注力していることのひとつが、フィルムの修復とメディアのフォーマット変換。フィルムは時間の経過と共に劣化し、いずれ見えなくなってしまう。また、テープもベータやVHSからブルーレイなどへの規格変更が急激に進んだように古い規格の再生機がなくなると、これらの内容も見られなくなってしまう。

「名作映画もあれば、庶民の日常の記録映像もある。貴重な歴史の財産が今、消えて無くなるうとしています。日本でこれまでに撮影された映像の8割は既に再生不能と言われています。先進国の多くは法律で定めて映像を保存しているのに、日本はこの部分が手付かずです。コンテンツ産業という華やかな部分ばかりに光が当たりますが、きちんと保存しないと、一度失ってしまったものは二度と取り戻すことができません。国会図書館にすべての印刷物が収められているのと同じように、映像も法律で定めて、将来に向けて保存する仕組みをつくる必要があると思います」

そのための働き掛けも積極的に行っているという長瀬氏。

「映像産業は今後も変貌を遂げるでしょうが、私たちが果たすべき役割はいつの時代にもあると思います。これからもオンラインワンであり続けるためにも、映像にこだわっていきます」